

地球にしみ入るセミの声

副会長 高木 茂
(日産車体㈱・取締役社長)



早朝、自宅周辺を散策するのが私の20年来の日課になっていますが、このところ夏に入ってある異変に気付きました。昔から夏といえばセミの大合唱を耳にしますが、今までは数種のセミの混声合唱だったものが、けたたましい鳴き声の独唱が聞こえて来るようになったのです。どうやら声の主はクマゼミのようです。いつからこんなにクマゼミが増えたのでしょうか？セミは地球温暖化による生態系の変化を確認するための指標生物だと言います。本来亜熱帯系の種であり、西日本を中心に生息していたクマゼミが徐々に生息域を北上させているとのこと。地球温暖化を顕著に表す事例だと思えます。

日本は20世紀の100年間で、平均気温が約1℃上昇したと言われています。特に都市部ではヒートアイランドの影響も追加され、東京では約2.9℃も上昇したそうです。また、熱帯夜の日数も都市部を中心に増加し、反面真冬日の日数は減少したとのこと。亜熱帯系のクマゼミには打ってつけの気候でしょう。地球温暖化はもうこんな身近な生態系までも狂わせ始めているということでしょうか？

かつて、かの松尾芭蕉が詠んだ「閑けさや 岩にしみ入る 蟬の声」の蟬(セミ)は何かということ、歌人の斎藤茂吉らが論争したそうです。大正15年頃の話です。結局、この句は7月中旬、山形県の立石寺で詠まれたことからニイニゼミであろうということになったそうです。しかし、今となっては、この句が詠まれた200年以上前の日本と現在とでは平均気温に大きな差があり、恐らくセミの生息域も大幅に変わってしまったのでしょうか、悲しいかなこんな論争すら困難になってしまいました。

現在、地球の平均気温は10年で0.2℃のペースで温暖化が進んでおり、このまま進めば今世紀の終わりまでには2℃上昇すると言われています。しかし、あらゆる予測で温暖化のペースは更に加速するとされ、2100年までに地球の気温は最大で6℃上がるとの説もあります。平均気温が6℃上昇したらどうなるのでしょうか？科学者たちは、想像を絶する激しい自然災害が起り、あらゆる生物が絶滅の危機にさらされる可能性すらあると言っています。これはセミの北上どころではありません。われわれは今、人類共通の危機に直面していると言えるのではないのでしょうか？今こそ世界が団結し、人類史上最も困難な危機

に立ち向かわなければならぬ時期なのでしょう。

先ごろ行われたG8(主要8カ国首脳会議)いわゆる洞爺湖サミットでも、環境・気候変動は主要議題として議論されたようです。しかしながらそこでは、各国の思惑や国益が優先され、「温室効果ガスの排出量を2050年までに50%削減するという長期目標を採択することを求める」という、何とも曖昧な表現を盛り込んだ宣言だけで、具体的な目標合意まではされなかったと聞いています。事態は火急を要するというのです。

こうした温室効果ガス削減に対し、各国が国全体として取組まなくてはならないのは当然のことでしょうが、低炭素社会をデザインしていくには、われわれ産業界がリードしていかなければならないのもまた自明の理と言えるのではないのでしょうか？とりわけ日本の自動車製造業には、さまざまな環境対策技術を世界に先駆けて実現してきた歴史があります。電気自動車や燃料電池車、水素エンジン車、ハイブリッド車、クリーンディーゼル車など、環境共生型の自動車やその技術を提供できる日本の自動車メーカーの役割は益々重要になってくるでしょう。世界の自動車文化を変革させるリーダー役は、日本の企業に託されていると言っても過言ではないと思います。

当工業会においても早くからCO₂排出量削減に取り組んで来ました。2008年度も主要活動項目の一番目に「環境対応自主取組みの推進」を掲げ、環境委員会をセンターに、CO₂排出量の削減活動を定着させ地球温暖化対策に貢献していくことを会員の皆様方と共に確認したところです。

CO₂排出量削減には、生産性の向上や設備改善、コージェネなどの省エネ設備導入等々大変な労力と多大な出費を伴いますが、会員各社のご努力により着々と成果を上げつつあります。こうした努力の積み重ねこそが人類を救う術だと思えます。

便利さ、快適さに慣れきってしまった生活と、上昇してしまった気温を元に戻すことはもはや困難と言われています。しかしながら、今後の上げ幅を最小限に抑制することはまだ可能だと思えます。それを成すのは原因を作ってしまったわれわれ人類の責務ではないのでしょうか？

そして、芭蕉翁の句に詠まれたセミの声が幻のものとならないようにするためにも…。